

登場人物

北野家

北野夏……東和日報運動部・記者。
月島秋生……夏の生き別れの兄。シンクロ日本代表。
冬美……夏の母。スーパージョー。パート。
春……夏の妹。大学四年生。
雪比古……夏の弟。中学三年生。

東和日報

わかば……東和日報写真部。
大島部長……夏の上司。東和日報運動部・部長。
神津……東和日報運動部・副部長。
三宅……東和日報運動部・記者。
新島……東和日報運動部・記者。

シンクロチーム

水島コーチ……男子シンクロチーム・コーチ。
サントロウ
アフロ
マコト
ナオキ
ユウスケ

テレビ局

台場……テレビ関東・報道部。
汐留……テレビ関東・人事部。

その他

明日香……秋生の恋人・キャバレー歌手。
神田橋……夏の彼・右寄新聞社会部。
会長……日本体育協会・会長。
CA／旅館の婆／看護婦／秘書
ナレA・B

1 機中の二人(テロップ1980夏)

暗転から薄明りになる、SE機内のアナウンス前の『ボン』の音、
気取った客室乗務員の声(録音)。

声

「当機は間もなくモスクワ国際空港に向け、最終の着陸体制に入ります。
どなた様も今一度シートベルトをご確認の上、お座席のテーブル、背
もたれを元の位置にお戻し下さいませ」

明転すると、アイマスクの夏の隣、ウォークマンで青い珊瑚礁を聞
きながらルービックキューブと格闘しているわかば。

及川CA(夏に) お客様、お座席を元の位置にお戻し下さい。こちらおさげし
てよろしいですか？」

SE、飛行機揺れる音。

乱気流に揉まれ、揺れる機内で右に左に傾く二人。

「大丈夫?」「お静かに!」「墜落する?」「黙れ!」「お静かにお願
いします!」「お前がうるせえんだよ」

轟音と共に着陸するジェット機、激しい振動。

暗転と共に一瞬の静寂。

音楽、『結婚しようよ』吉田拓郎、カットイン。

2 タイトル(東和日報運動部)

全員コスプレ、躍動する日本代表選手を表現する。パフォーマンス。
仮に体操、柔道、ボクシング、陸上競技、レスリング、けん玉、ジ
ャグリング、……終盤、タイトルのボードを持って列を作る。

タイトルボードは、

『モ』『ス』『ク』『フ』『1980』／『幻の』『日本代表』『取材』『日
記』(フェードアウト)

上手ナレ1「1979年12月、ソビエト連邦がアフガニスタンに軍事侵攻を開
始」

下手ナレ2「1980年1月、アメリカカーター大統領はテレビ演説でソ連の武
力侵攻を非難、一か月以内にアフガニスタンから撤退しない場合オリ
ンピックをボイコットすると表明」

ナレ3「1月21日、大平総理大臣はアメリカの考えに理解を示し、『ボイコッ
トも一つの方法として考える』と発表」

ナレ4「これを受けJOC日本オリンピック委員会は、各国と連絡を取り合い、
政府・日本体育協会・オリンピック委員会が一体となって問題解決にあ
たると発表」

ナレ5 「1月26日、アメリカは、IOC国際オリンピック委員会に対し、開催時期の延期、あるいは開催地の変更を提案」

ナレ6 「これを受け日本政府は『このままの状況での参加は不適切』という認識を示す」

上手ナレ7 「オリンピック委員会を傘下に抱える日本体育協会会長の発言に注目が集まる中」

日体協会長 「(壇上に現れて) あー、うーリンピックは、世界中の人々が安心して競技できる状態のもとに開催されねばならないわけで、諸外国と緊密に連携を取りあー、うー」

SE、特急列車(新幹線旧式?)の通過音。

上手に、大島を中心に、神津、三宅が現れて、

三宅 「なんです？あーうー、って」

大島 「大平総理の真似」

神津 「政府も日体協も、相変わらず玉虫色の見解ですね」

三宅 「ようするにオリンピック委員会に、自発的にボイコットを表明しろって言ってるんですか？」

大島 「政府が直接ボイコットしろとは言えないもんね」

上手ナレ8 「2月5日、IOC国際オリンピック委員会は、『軍事行動はオリンピックそのものに影響しない』と、予定通り8月開催を表明」

大島 「よし、わかった」

三宅 「わかった？何が？」

大島 「(呼び込んで) 夏！」

下手から「はい」と書類資料の山を抱えた夏が来る。

夏 「お呼びでしようか、部長」

大島 「あなたに専任で任せる」

夏 「任せる？何を？」

大島 「今日からあなたが、ウチのオリンピック担当キャップ！」

三宅 「え？」

新島 「(駆け出してきて) ええ？」

夏 「えー!？」

SE、特急列車の通過音。

夏、驚いて書類を放り出し、三宅と新島が慌てて拾う。

上手ナレ9 「オリンピックモスクワ大会、ナショナルエントリー締め切りまで三か月、果たして日本代表はモスクワに行けるのか？そして、入社3年目でオリンピック担当に抜擢された東和日報新聞社・北野夏記者の運命やいかに！」

下手わかばモノ 「その頃、東京都杉並区にある北野家では、オリンピックとは全

く関係ない事件が勃発しとりました」

どさくさに紛れ、誰かがセンターにちやぶ台をセット。

3 北野家

下手階段上からドタドタ逃げてくる学生服の雪比古、「待て！」と追って来るエプロン（割烹着？）の冬美。チェイス、そしてちやぶ台を挟んでにらみ合い。

「あ？」「え？その手に乗るか」「あれ？」「え？」、雪比古の一瞬の隙を突いて、冬美が飛び掛かって捕まえ、プロレス技をかける。

冬美 「ギブ？ギブアップ？」

雪比古 「ノー」

冬美 「更に締め上げ）ギブアップ？」

雪比古 「ノー！ノー！」

冬美 「行くか？行くなって言え！」

雪比古 「行かねーっ！」

夏が「ただいまー」と帰って来たところ、雪比古が冬美を突き飛ばし、ちやぶ台がひっくり返る。

夏 「何してんの？今夜はなに？」

冬美 「横浜の先まで面談に行った来たんだよ？」

雪比古 「ヨットスクールなんか行かねえ」

夏 「ヨットスクール？」

冬美 「雪比古みたいな登校拒否や、非行、家庭内暴力、色んな問題抱えた子の駆け込み寺みたいな学校。全寮制で、ヨットやウインドサーフィンを通じて心と体を鍛えてくれるんだって」

夏 「そこ、体罰で問題になってるヨットスクールじゃない？」

冬美 「そうなの？」

雪比古 「ほら見る」

冬美 「じゃどうすんの？このままずっと家にいんの？」

雪比古 「行くよ、ちゃんと元の中学に」

冬美 「いつ？二年も同じこと言い続けて。なんなの？行く行く詐欺？」

雪比古 「なに？」

冬美 「行く行くなって行って行かのは行く行く詐欺でしょ！」

夏 「まあまあ、別にいいじゃん。学校出てなくても偉くなった人はいっぱいいるし」

冬美 「人ごとだと思って」

夏 「思っていないよ弟のことなんだから。それよりあたしの話聞いて」

冬美 「（不機嫌に）なに」

夏 「聞いて驚くなよ」

冬美 「驚かないよ。早く言ってみな」

夏 「……あだし」

冬美 「ええ！」

夏 「まだ言っていない」

冬美 「知ってるよ、ボケたの。西川きよし風に。早く言ってみな」

夏 「……東和日報新聞社の、オリンピック担当キャップに選ばれた」

冬美・雪比古「……」

夏 「あれ、びっくりしない？」

冬美・雪比古「ええええええええ！」

雪比古「すげえじゃん！」

冬美 「なんで？」

夏 「あたしの実力が認められたのよ」

雪比古「モスクワ行くの？」

夏 「もちろん」

冬美 「マラソンの瀬古や、柔道の山下に会える？」

夏 「当然」

雪比古「すげー」

冬美 「でもなんで？今までマイナースポーツの、こんな小さな記事しか任せられなかったのに」

雪比古「射撃とかアーチェリーとか、ヨットとか」

冬美 「出たヨット！」

雪比古「もういいよ、その話は」

夏 「こうなった以上は競技の結果や記録のみを伝えるのではなく、なぜそうなったか、どこが勝敗の分岐点だったか、スポーツジャーナリズムの原点に立って、記憶に残る深い記事を書く」

冬美 「さすが入社三年目、難しいこと言えるようになったね」

夏 「て、部長が言ってた」

雪比古「いいな、モスクワ。俺もどっか遠くに行きてえな」

冬美 「まず近所の中学に行け」

夏 「二つ聞いていい？あんた学校も行かないのになんで毎日学生帽被って学ラン着てんの？」

雪比古「朝起きた時は行こうと思うんだよ」

冬美 「嘘つけ」

雪比古「嘘じゃねえよ」

夏 「じゃなんで行かないの？」

雪比古「……」

リクルートスーツの春が「ただいま」と帰ってくる。

雪比古「春姉、夏姉がオリンピック担当になったんだって」

春 「(素直に喜べず)……へー。でもお姉ちゃんらは運動部の記者だからオリンピックの記事を書いても別に驚くことでもないじゃん」

雪比古 「なんか、機嫌悪い？」

冬美 「内定、まだもらえないの？」

夏 「就活、うまくいってないんだ」

春 「うるさいな、ほっといてよ私のことは」

夏 「やっぱキー局は厳しいんじゃない？」

冬美 「そうなの？」

夏 「競争率ハンパないもん。テレビ局は日本中にあるけどキー局は東京に五つだけ。(春に)この際地方の局や下請けの制作会社も選択肢に入れてみたら？」

春 「地方局や下請けはいや」

夏 「高望みしたいのはわかるけど、滑り止めも考えなきゃ」

冬美 「別にテレビ局じゃなくてもいいじゃない、安定した仕事に就ければそれで」

春 「お姉ちゃんの時そんなふうには言わなかったくせに」

冬美 「夏は一次志望の新聞社にすつと決まったから」

春 「コネがあったもんね。大学の陸上部の先輩に推薦してもらったんでしょ？いいよね、体育会は就活が楽で」

夏 「あんたも運動部やればよかったじゃん」

春 「運動神経鈍いの知ってるくせに。なに？私が内定もらえないことで誰かに迷惑かけてる？」

雪比古 「なげえよな、春姉の反抗期」

春 「あんたに言われたくない」

冬美 「ハイハイ。けどすごいね、オリンピック担当されるってことは、新聞記者の金メダル取るようなもんだろ？選手としては参加できなかったけど、金メダルの記事を書く新聞記者にはなれた。新聞記者の日本代表に選ばれたってことだもんね」

雪比古 「うまいこと言うな」

夏 「(まんざらでもなく)なるほどね」

春 「ボーコットするんじゃないの？」

一同 「？」

春 「アメリカはソ連がアフガンから撤退しなかったら」

夏 「ボーコットなんかするわけじゃないじゃん。頑張って代表に選ばれた選手の苦勞が全部水の泡に」

春 「新聞記者のくせに新聞読んでないの？(床から取って)ほら、読売の世論調査、『ボーコット反対が34パーセント、賛成が40パーセント』『雪比古「ええ？(靴から取り出し)朝日の調査結果は、ボーコット反対35%、賛成22%だよ」

夏 「あんたなんで朝日新聞読んでんの？てかそれどうしたの？」

雪比古 「お隣さんが玄関にまとめて捨てて捨てるから」

夏 「それ捨ててるんじゃないから」

冬美 「待って、なんで読売と朝日で結果が違うの？」

春 「質問の仕方にもよるし、答える層にも違いがあるのよ」

夏 「お母さん、娘のあたしが東和日報なのに、なんでウチは読売取ってるわ

け?」

冬美 「後樂園球場の切符もらえるじゃん。便所紙も」

春 「トイレットペーパー」

冬美 「便所紙でいいでしょ、お便所で使う紙なんだから」

夏 「普通、親だったら娘の会社の新聞読まない?」

冬美 「ジャイアンツが好きなの、大相撲や競馬の情報も充実してるし」

夏 「スポーツ欄しか読んでないじゃん」

冬美 「失礼ねー、テレビ欄もちゃんと見てるよ(隣室へ)」

春 「ま、読売の予想通り、ボイコットで決まりだね」

夏 「そんな人ごとみたいに、私のモスクワ行きはどうなるわけ?」

春 「人ごとだもん。お姉ちゃんと私は別人格。オリンピックなんか中止にな

ればいいんだよ。テレビは朝から晩までうるさいし、選手団の交通費

や宿泊費もみんな税金。どう考えても税金の無駄遣いじゃん(去る)」

雪比古 「いつまで続くんだろうな、春姉の反抗期(去る)」

夏 「お前が言うな」

冬美、隣室から分厚いアルバムを手に戻ってきて、

冬美 「これ、懐かしいね」

夏 「(覗き込んで) 高3の県大会?」

冬美 「惜しかったねえ、最終レース」

夏 「最終じゃなくて決勝、レースじゃなくて競技」

冬美 「1500は首差、3000は鼻差で差し切られちゃったんだよ」

夏 「だから高校生の陸上競技を競馬用語で説明するな」

冬美 「わーこの写真大泣きしてる、ブスだこれ」

夏 「(閉じて) やめて」

冬美 「いいじゃん、あたしのアルバムなんだから」

夏 「……お母さん」

「?」

夏 「オリンピックにシンクロって競技があるの知ってる?」

冬美 「シンクロ?」

夏 「正式種目じゃないんだけど今年からプレ競技として開催されるの。その
男子シンクロメンバーの中に、……お兄ちゃんがいる」

音楽、家族のテーマ、中島みゆきの『ホームにて』『ルージユ』あ
るいは『沙夜香作曲バラード、インストも可』『カットイン』。

冬美 「……」

夏 「代表選手一覧の名簿で見つけた」

カラーコピーを差し出す。

冬美 「……」

夏 「面影あるよね、てか変わってないね。最後に会ったのはあたしが四年生の時だから、もう十五年前か」

冬美 「……秋生が、オリンピックの、代表選手に？」

夏 「すごいね」

冬美 「……」

夏 「近いうち取材で会おうと思う。お母さんはどうする？」

冬美 「……」

夏 「会いたいよね？」

冬美 「……」

夏 「いっしょに会いに行く？」

冬美 「……洗濯物、取り込まなきゃ」

冬美、コピーを突き返し、二階に去る。
夏、見送り、しばらくコピーを見つめ、前を向くと、

夏モノ「物心ついたころから両親は不仲だった。原因は父のアルコール依存、大工の父は働き者で優しくかったけど、酒を飲むと別人になった。些細なことでも母に手を挙げ、見かねて庇うと暴力は私にも向けられた。母は度々役所に相談に行き、その時は一旦治まってもすぐにまた同じことが繰り返された。お金のことで揉めることが多かった両親は私が小学校4年生の時、母が父に内緒で私の陸上用スパイクを買ったことをきっかけに大げんかになった。父は買ったばかりのスパイクを力任せに振り回し、その尖った鋼で母は頭を五針、私は（胸を押さえ）十二針縫う大げんかをした。次の日母はテーブルに離婚届を置き、私達を連れて家を出ようとした。私も身の回りの物をランドセルに詰め妹と弟を連れて母に続こうとしたが、五年生の兄は反対した。「一人にしたらもつとダメになる。悪いのは酒だ。酒さえやめてもらえば大丈夫」。いつまでも離婚に反対する兄に私は言った「じゃお兄ちゃんだけ残れば？私達はお母さんについていく。それでいいじゃん。じゃあね、バイバイ」……その時は、まさかその一言が、15年も私達家族を引き裂いたままになるとは思わなかった」

4 シンクロ代表の練習風景・『だるまさんが転んだ』が通過する

※基本、コーチと男子全員。

5 東和日報運動部（日替わり）

夏と、カメラマンベストにカメラを持ったわかばがいる。

夏 「実家に帰る？長崎の、カビ臭い写真館に？」

わかば 「父ちゃんがついに、人工透析ば受けることになって」

夏 「人工透析？」

わかば「いつ始めるかは都合に合わせるって言われたみたいやけど、透析するに
は週に二回誰かが送り迎えしてやらんと。元々いずれは家業は継ぐつ
て条件で東京に出してもらったし、最近帰省するたびに『いつ帰っ
てくるとね』って言われてたし」

夏「妹に頼めないの?」

わかば「妹は去年県外に嫁いだし、ここがちょうどいい引き際かなって」

夏「丁度いいって?」

わかば「夏が五輪担当になったお陰でうちもモスクワに行ける。入社した時から
の目標だった一面トップの夢が叶う。オリンピックで完全燃焼して、
有休消化したら長崎に」

夏「すぐ恋しくなるんじゃない?東京が」

わかば「東京はなんもかんもが忙しすぎ、うちの居場所じゃなか」

夏「居場所ねえ……」

わかば「都会の暮らしに疲れたらいつでも遊びにきんしゃい、日本一のちゃんぽ
ん、リンガーハットに連れて行く」

夏「リンガーハットは東京にもある」

わかば「長崎のリンガーハットは他府県のととは一味違うとよ」

夏「……コンビ解消は残念だけど、あたしにとってもあんたにとっても最初
で最後の一面トップ、モスクワで金メダルの写真撮って花道にしな。
今日の取材の段取りなんだけどね」

大島「企画書を手に見れて」夏、これどういうこと?」

大島に続き、三宅が現れる。

夏「企画書、読んでくれました?」

大島「男子シンクロなんて正式種目じゃないでしょ」

夏「四年後から正式種目になる見込みだし、日本代表には違いない、世界ラ
ンク 15位だそうです」

三宅「15位?」

大島「何チーム中?」

夏「(資料を確認し) 15チーム」

大島・三宅「……」

夏「チームの成り立ちが面白いんです。元々大学まで競泳や水球やってた選
手が集まって、どんな競技でもいいから日本代表になりたいって」

三宅「本業がダメだから副業で稼ごうみたいな感じっすか?」

大島「そんな競技より、もっと人気のある」

夏「シンクロが終わったら他の競技もいきます。とりあえず今日は、(メモ
を見て) 女子体操、自転車、柔道、レスリング、あとは」

大島「一日でそんなに回るつもり?」

夏「ほとんどの競技が国の強化施設で練習してるし、とりあえず『私が東和
のオリンピック担当です』って挨拶だけでも」

三宅「どうせプール行くなら競泳とか飛び込みを先に」

夏「(大島に) お願いします!シンクロから行かせてください!」

大島 「……まあいいわ、そこまで言うなら行って来たら」
三宅 「え？」
夏 「ありがとうございます！行ってきます！（去る）」
わかば 「行ってきます！（去る）」
三宅 「いいんですか？」
大島 「いいのよ、どうせ」
三宅 「どうせ？」

同じ室内一角で聞いていた神津と、お茶セットのお盆を手にした新島も現れる。

神津 「二人ともボイコットはありえないと思ってるんですね」
大島 「よく言えばポジティブ、言い方を変えれば、残念」
新島 「ボイコットで決まりなんですか？」
神津 「与党の幹部は、「アメリカが参加しないのに参加できるわけがない」って言ってるらしい」
新島 「99%ボイコットだから、夏をキャップに？」
大島 「正式に決まるまでは、一応取材を続けるしかないからね」
新島 「つまりあの二人は、捨て駒？」
三宅 「捨て駒って（ひどい）」
新島 「だって、ボイコットで記事の扱いが小さくなるの確実だから担当替えをしたってことでしょ？」
三宅 「一応教えてあげた方がいいんじゃないですか？モスクワに行ける可能性は極めて低いって」
大島 「あんたらやる気である？スタートラインにも立てない選手の取材に行つてこいって言われて」
三人 「……」
神津 「多摩川寄って後楽園球場向かいます（去る）」
大島 「よろしく。社食混むから先行くよ」

三宅、新島、「俺も」「私も行きます」と去る。
音楽、『カチューシャ？さくら？マイムマイム？（シンクロ練習のテーマ）』カットイン。

6 日本代表総合練習施設の一角

男子シンクロチームの秋生、サンタロウ、アフロ、マコト、ナオキ、ユウスケが、掛け声に合わせて奇妙なポーズでストップモーションを繰り返す。※練習内容、詳細未定。

壇上に夏とわかばが現れ、注目する。写真を撮る。

夏は秋生に気づき、わかばも察するが、練習に集中している秋生は夏らに気づかない。

S E、踏切。

マコト「(気づいて) おつかれさまです!」(W、カットアウト)

コーチが現れる。

コーチ「集合」

一同「はい」

コーチ「番号」

それぞれ「1. 2. 3. 4. 5. 6!」

コーチ「あとのメンバーは?」

秋生「たぶん、バイトで遅刻だと思います」

コーチ「(呆れて) みんなモスクワに何しに行くの? 参加することに意義ある?

勝つことに意義があるんでしょ?」

秋生・マコト・ナオキ「はい!」

コーチ「この世で一番正直なのはスポーツ、練習は数学、流した汗、涙の数だけ強くなる。まぐれや奇跡を起こせるのは、誰より汗と涙を流した人だけ!」

秋生・マコト・ナオキ「はい!」

コーチ「あたしこれから日体協で会議だし、ちよつとミーティングしたら? 今後どういうモチベーションでシンクロと向き合っていくか。秋生、あとで報告して」

秋生「はい」

コーチ「おつかれ(去る)」

一同「おつかれさまです!」

コーチを見送った夏が声をかけようとした時、

秋生「今後は練習に支障をきたすバイトは禁止にしましょう。コーチの言う通り、俺たちはソ連に観光に行くわけじゃない」

マコト「賛成です。これで最後、モスクワで思い切り演技して有終の美を飾りろ うって決めたじゃないっすか」

サントロウ「だよな(肩に手を置く)」

ナオキ「俺も賛成です」

サントロウ「ごめん、ちよつと、先抜けていいかな」

アフロ「なんで」

サントロウ「お袋の病院に」

アフロ「嘘だ、どうせバイトでしょ。それともデート?」

サントロウ「お先!」

アフロ「ちよつと!」

一同、サントロウを追って去る。
ため息の秋生に、夏が近づく。

夏 「お兄ちゃん」

秋生、初めて夏だと気づく。

秋生 「夏？」

SE、踏切。

見つめ合う二人。

わかばが、写真を撮る。アングルを変え二枚、三枚。

夏のアイコンタクトを受け、わかばが去る。

また見つめ合う二人。

暗転。

7 別の一角

アフロがサントロウを連れて来る。

アフロ「マコトとなんかあるんすか？」

サントロウ「なんかって」

アフロ「変な目で見てましてよね。肩に手置いて『だよな』『こんな目で』」

サントロウ「見てねえよ。離せよ、お袋の病院に」

アフロ「俺の目は節穴じゃない、浮気はすぐ見抜く、未遂でも見逃しません！」

サントロウ「じゃ試してみる？」

アフロ「何を？」

サントロウ「愛の強さ。(ゴムを出し)俺とお前、どっちの愛がより強いか」

アフロ「なんか、嫌な予感がします」

サントロウ「先に離れたら負け、最後まで啜えた方が愛が強い。名付けて、愛の

リトマスゴムパッチン」

アフロ「嫌な予感が当たる気しかない」

サントロウ「(威嚇して)逃げるのか？愛を証明できないのか？」

アフロ「……わかったよ。勝負してやろうじゃねえか」

サントロウ、アフロにゴムパッチンの端を啜えさせると自らも啜えてだんだん後ろに下がる。上下に広がって延びるゴム。やがてサントロウがゴムを離し、アフロの顔面にパッチン！

アフロ「ほら、やっぱり！（サントロウを追って去る）」

SE、踏切の音。

8 元の一 corner

夏と秋生が互いの境遇を知り合った。

秋生 「そうか、みんな元気か」

夏 「お兄ちゃんは？10年前にお父さんが亡くなってからどうしてたの？」

秋生 「高校、大学も水泳部の寮で、今は高円寺の六畳一間に」

夏 「一人暮らし？」

秋生 「いや、今は二人」

夏 「(察して) 彼女？」

秋生 「うん、まあ」

夏 「意外に近くに住んでたんだ、ひよつとしたら吉祥寺とかですれ違ってたかもね」

秋生 「どうかな、俺はほぼチャリ移動、トレーニングも兼ねて」

夏 「シンクロ、なんでプールで練習しないの？」

秋生 「なかなか使わせてもらえないんだ。競泳、水球、飛び込みの練習が休みか、終わってからでない」と

夏 「だからこの線路際の駐車場で？」

秋生 「正式種目に比べて補助金も少ない、だからみんなバイトしながら」

夏 「さつきこれで最後って言うってたけど、次は正式種目になるかもしれないのに解散しちゃうの？」

秋生 「プロがあるわけじゃないし、あと四年続けてもその先が見えない。だからモスクワを最後に解散しようって決めたんだ」

夏 「でもすごいね、日本代表」

秋生 「俺も驚いた。木登りしか取り柄がなかった夏が、まさか新聞記者に」

夏 「三大紙と違って発行部数も少ないマイナー新聞だから。でもオリンピックク担当された時はすごい嬉しかった」

秋生 「お互い悔いのないオリンピッククにする為に、努力あるのみだな」

SE、踏切。

弁当のバッグを提げた明日香が現れる。

明日香 「あれ、もう練習終わり？」

夏 「もしかして、高円寺の六畳一間の？」

秋生 「うん」

夏 「初めまして、妹の夏です」

明日香 「(驚いて) イモウト？」

夏 「ついさつき、15年ぶりに再会して」

明日香 「(慌てて髪など直し) 明日香です、はじめまして」

夏 「(秋生に) 結婚してんの？」

秋生 「(慌てて) してないしてない。まあ一応、オリンピックが終わったら結婚？」

秋生 「いや、今のところ一応、そんな感じだけど」

夏 「けど？」

明日香 「(不機嫌になり) はい、お弁当。リハあるから行くね。じゃ夏さん、また」

夏 「さよなら」

明日香、不機嫌に去って行く。

秋生 「お前が変なこと聞くから」

夏 「まずいこと言った？リハって何してる人？」

秋生 「歌手」

夏 「プロの歌手？」

秋生 「一応な、今は新橋フロリダってキャバレーで一晩に3ステージ」

夏 「どこで出会ったの？」

秋生 「コインランドリー、乾燥機間違えてあいつのジーンズ持って帰って。お前は？いるのか恋人」

夏 「……まあ」

秋生 「へえ、どんな人？」

夏 「……」

わかば 「遠慮気味に現れて」夏、次のアポ、朝日生命体操クラブ」

夏 「じゃまた。よかったら近いうちにお母さん達にも会いに来て」

秋生 「うん、オリンピックが終わったら」

夏 「なんで？」

秋生 「モスクワが終わるまではシンクロに集中したいから」

夏 「別に家族に会ったからって」

わかば 「腕時計を気にして」夏

夏 「またゆっくり。じゃあね（去る）」

アフロに追われ、サンタロウが逃げて来る。

暗転。

9 夏とわかばの決別

取材を終えて、ベンチで一息ついている二人。

夏 「体操、自転車、レスリング、どの競技のどの選手もみんな頑張ってたね。スポーツっていいな。あたしも高校時代陸上部でさ」

わかば 「インターハイ目指してたんでしょ？あと1センチ届かず優勝逃した話もう何回も聞いた。ずーっと運動部だったからスポーツ頑張ってる人を応援したいと思って運動部の記者になったんでしょ。でも本当にいいの？」

夏 「なにが？」

わかば 「アメリカがボイコットを訴えとるんは、戦争に反対の意見を示すため。だとしたら日本がモスクワに行くとな連の軍事行動を認めることに」

夏 「そんなのあたしらが考えることじゃないでしょ」

わかば 「今こうしてる間にも、ザリガニスタンは戦争でひどい目に合う人が」

夏 「アフガニスタン、ザリガニスタンじゃなくてアフガニスタン」

わかば 「人ごとは思えん、ウチのお父ちゃんは手帳ばもつとるし」

夏 「手帳？」

わかば 「お父ちゃんはピカにやられて左耳が聞こえん」

夏 「だからあんたは小さい時からこの世の中で一番悪いのは戦争だって教えられて育つたんでしょ？小学校や日曜学校で被爆者の体験談を散々聞かされて、戦争がいかに愚かなことか何時間も話し合ってたんでしょ？」

わかば 「都会の人は30年前、長崎と広島がどげなひどい目にあつたか」

夏 「知ってるから。都会の人もちゃんと習ってるから」

わかば 「生き残つた人がどげな思いで生きて来たかまでは知らんやろ？写真で見たり、本で読むのとは全然違う。うちは被爆二世として、世界中のどんな戦争にも」

夏 「気持ちよくわかるけど」

わかば 「できることならうちもモスクワに行きたか。飛行機もホテルも会社の金やし。ばつてんオリンピックのせいでアクアマリンスタジアムの人が」

夏 「アフガニスタン。じゃ降りれば？ピンボケカメラマンの代わりはいくらでもいるし」

わかば 「ピンボケ？」

夏 「頭もピントもボケボケじゃん」

わかば 「脳みそ筋肉女に言われとうなか」

わかば 「あんたこそ、肝心なショットはいつもピンボケ、アングルセンスなし、遅刻魔で集合場所間違えてしょつちゆう現場で迷子になる万年ダイエッター女！」

わかば 「ペチャパイの、万年不倫女のくせに」

夏 「なに？」

わかば 「右寄新聞社会部の人、今も付き合うとるくせに」

夏 「……なんか迷惑かけた？関係ないでしょ？あたしには結婚願望もないし、どうせこんなどし」

わかば 「出た」

夏 「なに？」

わかば 「そげな傷、日帰り手術ですぐ治るって教えたやろ？最近は医療技術が進んでたいがい傷はきれいに治るって。ついでにそのペチャパイの豊胸手術も受けたら一石二鳥ばい」

夏 「うるせえよ、この傷はあえて消してないの」

わかば 「なして？パンフレット渡したやろ、イエス高須クリニック」

夏 「あのおじさん顔が怖い、言うことも怖い」

わかば 「なら、タカノユリビュートイークリニックで」

夏 「高野は瘦身エステ、エステと美容整形の区別もつかねえんだよ」

わかば 「なら、北海道大学の西浦教授に」

夏 「西浦教授はクラスタ対策の人、専門家会議の8割おじさん」

わかば 「(共立美容外科のCMを歌いながら踊りだす)」

夏 「何してんの？もうコンビ解消したんだからとっとと長崎帰れ(去る)」

わかば 「(共立美容外科を歌いながら、追って去る)」

春が面接官の台場、汐留、本部長の前で実技演習している。

春 「失礼します(と入室して来る)」

台場 「どうぞ」

春 「小さく咳払いして」 天気予報です。気象庁によりますと、伊豆諸島の東海上には発達中の低気圧があり、東北東へ進んでいます。また関東甲信越地方の上空約1500メートルには強い寒気が流れ込んでおり、明日朝にかけて関東地方南部を中心に雪や雨が降り」

汐留 「はい、もういいよ」

春 「ありがとうございます(座る)」

台場 「志望動機を聞かせて下さい」

春 「衛星放送の開発にも積極的な御社のビジョンに共感し、私も日々チャレンジし成長したいと思ったからです」

汐留 「オリンピックボイコット問題についてどう思う?」

春 「……?」

汐留 「想定問答を暗記するだけで自分の意見を言えない人材はどこ行っても通用しないよ」

春 「……個人的には、モスクワに日本選手を派遣して欲しいと思ってます」

汐留 「なぜ?」

春 「……それは」

汐留 「アメリカの意向を無視して参加すれば問題はスポーツに留まらない。それでも参加が望ましい?」

春 「……」

汐留 「彼氏いる?」

春 「今はいません」

汐留 「本当かなー。飲み会好き?好きじゃないとこの業界やっていけないよ」

春 「特に、好きでも嫌いでも」

汐留 「ちよつと立ってみて」

春 「はい(立つ)」

汐留 「スカートあげて」

春 「はい?」

汐留 「実際カメラ前に立つ姿をイメージしたいからスカートあげて」

春 「(スカートの裾をあげる)」

汐留 「もつと。……もつと上げて」

台場 「おい」

汐留 「責任者は俺なんで。そのまま笑顔で一周回って」

春、言われた通り一周回る。

汐留 「ご苦労さん、もういいよ」

春 「失礼します。ありがとうございます(去る)」

二 だるまさんが転んだが通過するくサンタロウとアフロ

アフロがサンタロウを引き留め、『真実の愛を証明してやる』と
ゴム手袋を時間内に破裂させる芸を披露する。
手袋が破裂して、
M、『木綿のハンカチーフ1番と4番サビ』（仮）、カットイン。
場面転換。

三 キヤバレー新橋フロリダの歌謡ショー

壇上（客席）で会長が神田橋の接待で飲んでいる。
明日香、歌う。バックダンサー（咲、ユウ）。
明日香、歌い終わってそのまま居残りで、

四 秋生のアパート

秋生が筋トレしながら現れる。

明日香「なんで教えてくれなかったの？妹がいること」

秋生「もう一生会うことないと思ってた。お袋やもう一人の妹、弟にも」

明日香「あたし会いたい、みんなに挨拶したい」

秋生「なんで」

明日香「あたしには家族がいなくて秋生にはいた。結婚すれば義理の親子、兄弟ってことになる。挨拶するのは当然でしょ？」

秋生「……じゃ、オリンピックが終わったら」

明日香「オリンピック前じゃダメなの？」

秋生「色々落ち着かないだろ」

明日香「もしオリンピックがなくなったら？ボイコットしちゃったらあたしたち
どうなの？」

秋生「……本当にいいのか、紅白に出るような歌手になる夢」

明日香「よくない。だけど私は決めた。なのに秋生はいつまでも決めない」

秋生「そんなこと」

明日香「じゃなんで会わせてくれないの？」

秋生「だから、オリンピックが終わったらって言ってるだろ」

明日香、お腹を気にして考える。

明日香「もう無理。これ以上待てない。秋生のことは好きだけど、秋生との未来
が想像できない。秋生は私を見てない。見てるふりして、どっか遠く
の、私の向こうの何かを見てる」

秋生「今はとにかく、オリンピックに集中したいだけだっただって」

明日香、棚から風呂桶と着替えの袋を取り、銭湯へ。

秋生 「俺も行くよ（追いかけて）」

暗転。

「4 繁華街の小さな公園」

春と台場が歩いて来る。

春 「びっくりしました、あんな高級店に連れてってもらえると思ってなかったから、本当にごちそうさまでした」

台場 「しかしアレはまじかかった、ダメだよボイコット反対なんて言っちゃ」「どうしてですか？」

台場 「政府も日体協もボイコットありき。我々そのは空気を読んで、『ボイコットやむなし』に世論を誘導する」

春 「マスコミの役割は『権力を監視し、暴走を許さない』ってことですよね？」

台場 「暴走してるのはソ連」

春 「だけど」

台場 「放送事業は許認可制、政府や警察に目つけられたら仕事しにくくなるだろ（人通りを気にして）ちよつと休んで行こう」

春 「ホテルの入り口を見て）休む？」

台場 「そこでちよつと」

受付の不愛想な婆「突然現れて）いらっしやいませ、〇〇休憩 4500 円（げんごます）」

台場 「エントリースーツに赤入れて、模擬面接に付き合ったのは単に君が大学の後輩だからじゃない。欲しいんだろ、内定。視聴率三冠王のテレビ局にどうしても入りたいたんだろ？（連れ込もうと）」

春 「待って下さい」

台場 「ウチの倍率知ってる？六大学出たって簡単には入れない、ライバルは多い、次はいよいよ最終面接じゃないか（連れ込もうと）」

春 「いやです」

台場 「欲しいんだろ、内定」

春 「いやです！」

春、台場を突き飛ばし、その場にしゃがみこんでしまう。
見つめ合う二人。

台場 「……冗談だよ、ノリ悪いなあ。冗談に決まってるじゃん。ま、がんばって」

SE、横断歩道の『通りゃんせ』カッティン。
取り残される春、何かに気づいて物陰へ。

夏と神田橋が現れる。

神田橋 「すごいじゃないか、五輪担当となりや、ついに一面トップの夢も叶う」

夏 「神田橋さんが東和に推薦してくれたおかげです」

神田橋 「しかし、なんでまたこのタイムミングで？」

夏 「よくわかんないんですよ。今まで人手不足だからってプロ野球と大相撲の担当が交代で受け持ってたんだけど、いきなり入社三年目の私が」

神田橋 「部長に袖の下でも掴ませたか、あるいは色仕掛けで落とされた」

夏 「ウチの部長は女です。もしかしたらスポーツの神様がプレゼントしてくれたのかな。体育会一筋でやって来たのに、一度も勝利の女神に微笑んでもらえなかったから」

神田橋 「また婚期が遅れるな。ま、俺にとつてちゃ幸いだけど」

夏 「とにかくこのチャンス絶対ものにして、自分の居場所を見つけてます」

神田橋 「居場所？新聞記者としての？」

夏 「それもあるけど、もっと広い意味で、あたしがこの世に存在してる意味っていうか」

神田橋 「さりげなく結婚指輪を外す。哲学だな」

二人、いつもの感じでホテルへ入ろうとする。

受付の婆 「毎度ありがとうございます、ご休憩 4500 円、後清算でございます。お履き物そのままどうぞ」

SE、横断歩道の『通りゃんせ』カットイン。

ホテルに消えた二人を見ていた春、現れて、

春 「……」

暗転。

15 北野家

ちやぶ台を挟んで冬美と雪比古がにらみ合い。

傍らで春は我関せずでルービックキューブしている。

雪比古 「……転校は、しない」

冬美 「このままずっと引きこもって、隣の新聞盗み読みして、一生ヤドカリみたいになんて生きてくの？」

雪比古 「おかしなのは俺じゃない、学校や社会の方だ」

冬美 「学校行って先生に意見言え」

雪比古 「協調性を身につける、人に迷惑かけるな。周りとうまくやれる奴が正しくて、そうじゃない奴は弾かれる、そんな社会や教育を大人は誰も疑わない」

冬美 「(春に) なんとか言って、この朝日新聞真理教に」

春 「(見るが、何も言わない) ……」

雪比古 『普通であること』が一番大事と教育されて個性が育つか？」

冬美 「(雪比古に) もう朝日読むのやめな。お隣さん困ってたよ。新聞出して
も便所紙置いてつてくれないって」

夏が 「ただいま」と帰ってくる。

夏 「今夜はなに？ヨットスクールはやめにしたんでしょ？」

雪比古 「春姉や夏姉はこの国に希望を持つてるか？」

夏 「希望？」

雪比古「今の日本が自由で充実した社会だと言えるか？同調圧力ばかりの社会が
つらくて、一年に三万人も自殺してるこの国で、普通に暮らしてる人
の方がどうかしてると思わないか？」

冬美 「(立って) お隣さんにもう古新聞を出すなって言ってくる」

雪比古 「やめろ！」

夏 「なに？古新聞がどうしたの？」

雪比古「……本当は俺だって焦ってる。自分を責めてる。このままじゃいけない、
家族に迷惑かけてる。頭でわかってても行動に移せない。寝る時は明日
こそ学校に行こうと思っても、いざ行こうとすると体が動かない」

夏 「タケシ君のこと？」

冬美 「まだ引きずってるの？」

雪比古 「……」

夏 「(冬美と見合わせてから) あんたの気持ちもわかるけど」

雪比古 「わかんねえよ、わかるわけねえだろ！(自室に去る)」

夏 「雪比古？」

冬美 「ほっとけ、明日になったらケロっとしてるよ。癩癩持ちの屁理屈大王、
お父さんに似ちゃったんだね」

夏 「(春の視線に) なに？」

春 「べつに(ルービックキューブに戻る)」

夏 「(座って、冬美に) お兄ちゃんに会ってきた」

冬美・春 「……？」

夏 「高田寺のアパートに彼女と住んで、オリンピック終わったたら結婚する
んだって」

冬美 「……」

夏 「会いに行ってみよ、みんな。ね、春」

春 「……」

夏 「何？」

春 「……(キューブに戻る)」

冬美 「いいよ、お母さんは」

夏 「何で？」

冬美 「(たいしたもんだね、一人で大人になって、オリンピックの代表選手に」

夏 「会って、直接そう言ってあげなよ」

冬美 「そんな資格ないよ、母親として何もしてやってないし」
夏 「……あの時お兄ちゃんがあの家に残ったのは」
冬美 「お母さんのせい」
夏 「違う。私のせいだよ」

SE、蟬の鳴き声。

冬美 「もういいよ、オリンピックに出たらテレビで」
夏 「テレビには映んない、正式種目でもメダル候補でもないし」
冬美 「じゃ、モスクワの空に向かってお祈りする。最後まで無事に、悔いなく力を発揮できますように」(フェードアウト)
夏 「……(閃いて) じゃいつしよにモスクワ行こう。お兄ちゃん応援しに。あたし会社の金で行けるし、お母さん達の旅費ぐらい何とかする。そうしよう。みんなで行ってお兄ちゃんと再会しよう。春も行くよね？」

春 「(無視)……」
夏 「なんなの、その態度」
冬美 「お母さんの分まで応援して来な」
夏 「なんで？よく言ってるじゃん、この世で一番大事なのは家族の信頼。会えばもう一度その信頼を取り戻せんじゃん」
春 「よく言うよ」

夏 「え？」
春 「家族の信頼？お姉ちゃんそんなこと言えんの？言う資格あるの？」
夏 「さつきから何が言いたいわけ？」
春 「自分の胸に手を当てて考えたら？」
夏 「就活うまくいかないの？だから言ったじゃん、高望みばっかりしても」
春 「いい加減やめてくれる？自分のこと棚に上げて上から目線で説教するのは棚に上げて？」
夏 「お母さんや私たちに内緒にしていることあるでしょ？」
春 「ないしょ？」
夏 「じゃ聞かせてもらうけど、お姉ちゃんは今夜、どこで誰と、何をしていたの？」

SE、ツクツクボウシ。

夏 「……」
春 「言えないの？そんなんで家族の信頼保てるの？」
夏 「……」
冬美 「別にいいじゃん」
春 「何が？……何がいいの？」
冬美 「そりやあるでしょ、内緒の一つや二つ、この年になれば誰でも。内緒があっても信頼は揺らがない、それが家族」
春 「(感極まつて)……わかんない、全然わかんない、なんでいつもお姉ちゃんの味方なの？私が生まれてからずーっと！(夏に)そうだよね！」

夏、黙って去って行く。(フェードアウト)

冬美 「もうテレビ局は諦めたら？普通の会社でいいじゃん。つぶれる心配なくて、月々ちゃんとお給料もらえれば」

春 「東和日報よりいい会社に入りたい！お姉ちゃんよりいい会社に入って、誰にも代わりが利かない仕事、絶対に必要だと思われて働きたい」

冬美 「つまり、夏に負けたくないの？」

春 「ここで勝てなきゃ一生見下されたままじゃん」

冬美 「夏もあたしも、お前を見下したことなくか一度も」

春 「そうだよ。元々興味ないもんね。アルバムの写真だってお姉ちゃんばっかり、私の方が成績よくても、スポーツしか取り柄がないお姉ちゃんばっかり褒めて。スキヤキの時、お姉ちゃんにはもつと肉食えつつ言うくせに、私や雪比古には『おネギと白滝あまつてるよ』。メロン切った時はいつも私が一番小さかった」

冬美 「よしわかった、今からメロン買ってくる。半分に切るからあんたひとりで全部食べな」

春 「メロンの問題じゃない」

冬美 「お肉だけのスキヤキに作るうか？卵ワンパック一人で使い切っていいから」

春 「そういう問題じゃない！」

雪比古 「(現れて)俺も常々、うちの兄弟は平等じゃないと思ってた。母ちゃん
22

は日常的に夏姉の肩を持つ場面が数多く見受けられる」

冬美 「やめな、朝日新聞みたいな喋り方」

雪比古 「言論の自由を弾圧する気か？」

冬美 「鼻屑してるよ。悪いけどあたしは夏を鼻屑してる」

春、雪比古、啞然と見合わせて、

春 「(啞然と) 認めた」

雪比古 「しかもかなりあっさり」

冬美 「もちろんあんた達も大事、いつまでも健康で、幸せになってもらいたい。だけどあの子は特別、どうしても幸せになってもらわなきゃ困る。あたしはあの子に、借りがある」

M、中島みゆき『ホームにて』(仮)、あるいは沙夜香作曲、カット
イン。

雪比古 「借り？」

冬美 「あの子のこころ(胸)」

春 「左胸の？」

雪比古 「12針？」

春 「あれは、お姉ちゃんが小学校の時に」

冬美 「自転車で転んだんじゃない」
雪比古 「え？じゃ、何の傷？」
冬美 「陸上用のスパイクでえぐられた」
雪比古 「えぐられたって、誰に」
春 「(察して) まさか」
冬美 「お母さんが悪いんだよ、小学校の先生に、『末はオリンピックも夢じゃない』なんて言われたもんだから調子に乗ってスパイク買って来て。なのにお母さん、夏を守ってやれなかった。大事な女の子の体に、一生消えない大きな傷を。(感極まって) ……だからどうしても、何が何でもあの子には幸せになってもらいたい。お母さんにできることは何でもしてやりたい」

暗転。

16 同・夜の庭

夏が、缶ビールの栓をプシュッと開ける。
明転。
ゴクゴク飲んで、プハーッと息を吐く。
冬美が現れ、しばらく夏の背中を見つめる。

夏 「(気づいて) いたの？」 (フェードアウト)
冬美 「(こんなところで晩酌?)」
夏 「…ねえ、お母さんの夢って何？」
冬美 「私の夢は、…夏が一面トップの記事を読んで、…春の天気予報をテレビで見ても、雪比古の卒業式に出席すること」
夏 「子供のことだけじゃん。その後は？自分の夢は？」
冬美 「母親の仕事は子供の心配をすること。雨が降ったら濡れてないか、風が吹いたら寒がってないか。お腹すかしてないか、学校や職場でみんなどうまくやれてるか、悪い男に騙されてないか」
夏 「……」

SE、ツクツクボウシ。
春と雪比古が、こっそり縁側に出て、立ち聞き。

冬美 「(吹っ切って) 行ってみようかな、モスクワ」 (カットアウト)
夏 「え？」
冬美 「15年か、過ぎてみたらあつという間だけど、色々あったね。秋生にも、色々あったろうね」
夏 「お兄ちゃんも聞いてもらいたいことがたくさんあると思う」
冬美 「そうかなー」
夏 「絶対そうだよ」
春 「私も行く。残念ながら、お兄ちゃんの顔も覚えてないけど」

雪比古 「(現れて)俺も行く。兄がいるという事実すら忘れ去ってたけど」

春 「家族旅行なんて、熱海の花火以来？」

雪比古 「熱海の花火？俺も行った？」

春 「まだこんなだったもんね」

雪比古 「モスクワ行き金、本当に夏姉が出してくれんの？」

春 「そんなに出せる？三人分も」

夏 「社会人舐めんよ、こう見えてけっこうやりくり上手なの」

冬美 「家に入れてる金は雀の涙だけだ」

夏 「それ言われるとつらい」

冬美 「よし、じゃ四人で行ってみよう」

春 「モスクワか、どんなところだろ」

雪比古 「とりあえず、マルクスの資本論は読んでおくか」

夏 「そんなの読まなくていい」

冬美 「ただし条件がある」

三人 「？(と見合わせる)」

夏 「条件って？」

冬美 「春はモスクワまでに内定もらうこと」

春 「……はい」

冬美 「雪比古は、ちゃんと学校に行く。それがモスクワ行きの条件。約束でき

るよ」

雪比古 「……俺、俺は、……トイレ(逃げる)」

春 「雪比古(追いかけて)」

冬美 「こら、待て！(追いかけて)」(フェードアウト)

見送った夏、残りのビールを一口飲むと、決意の顔で。

M、コロプチカ3(歌無し)あるいは、ロシア民謡一週間、カット

イン。

夏 「……(去る)」

【モニタージュ・「カチューシャ」】

シンクロチームがだるまさんが転んだで通過する。

その様子を壇上から見つめる明日香。

わかばが練習風景を撮る。

明日香、お腹を気にしてどこかに向かう。

× ×

雪比古、自作の作文を取りだして読み返す。

洗濯物を取り込んだ冬美が現れると、

雪比古は原稿用紙を見られまいとどこかに行く。

× ×

春、大判の封筒を手はどこかに電話をかけていて、

春 「お忙しいところ失礼いたします。新卒採用の件でお電話差し上げたんで

すが、まだ間に合うでしょうか?」

× ×

サンタロウ、アフロ、浮気疑惑の進展。

再びゴムパッチンネタ?。」

× ×

他、詳細未定。

SE、電話の呼び出し音。

18 とある産婦人科医院の前々マンションの一室

夏と神田橋が電話で話している。

神田橋 「もしもし」

夏 「私です。仕事中?」

神田橋 「接待麻雀、記者仲間と検事長を囲んで」

SE、麻雀パイをかき混ぜる音。

夏 「お忙しいとこそいけません、ちよつと、聞いてもらいたいことが」

神田橋 「仕事?」

夏 「いえ、……近々、時間作ってもらえます?」

神田橋 「わかった、予定見て連絡する」

夏 「お願いします。じゃ」

夏が電話を切ると、明日香が産婦人科から出て来る。

看護婦 「追ってきて、奥様、母子手帳忘れてらっしゃってよ」

明日香 「あ、すいません(受け取る)」

看護婦 「大事にして下さい、これからずっと使うものになりますから」

明日香 「はい、ありがとうございます」

夏 「明日香さん?」

明日香 「……」

夏 「(近づいて)もしかして……(おめでた?)」

明日香 「……(頷く)」

夏 「おめでとうございます。え?兄には?」

明日香 「……あたし達、もうダメかも」

M、カチューシャ(オルゴール)、カットイン。

夏 「なんで?」

明日香 「なんでだろ」

夏 「だって、赤ちゃん」

明日香 「……」

夏 「ちゃんと話し合った方がいいんじゃないですか？もしなんか、あたしにできることがあったら」

明日香 「ありがと。夏さんは？恋人いないの？」

夏 「まあ、一応……」

明日香 「どんな人？」

夏 「大学の先輩で、あたしをこの世界に引っ張り上げてくれた人。もともと……好きなたちやいけない人だったんだけど」

明日香 「(察して) 尊敬が、恋愛に発展しちゃった？」

夏 「……ずっと、誰にも言えないコンプレックス抱えてて、だけどなぜかその人には素直に話せて、言ってくれたんです、『コンプレックスも個性の一つ、個性を理解できない人の目なんか気にするな』」

明日香 「きつとその人……、弱くて、傷つきやすく、面倒くさい、素敵な人なんだね」

夏 「……はい。よくわかりますね」

明日香 「いろいろあるよね、生きてたら。いいんだよ、失敗したら何度でもやり直せば。私も昔、大失敗した」

夏 「そうなんですか？」

明日香 「……怖いんだ、これで飛んだら二度目だから。前も結婚の約束して、式場予約して、披露宴の座席表まで決めたのに、突然他に好きな人ができたって告白されて」

夏 「(思わず) 最低」

明日香 「その通り、最低だけど大好きだった。好き嫌いと善悪は別。正しいから好きになるわけじゃないし、間違ってるから嫌いになるわけでもない」

夏 「……ですね」

明日香 「後悔してるのは、その時彼を責めなかったこと。本当に好きだったから許しちゃった。それが彼の生き方だからしょうがないって、泣いて縫りもせず、怒り狂って責めもせず、だからまだ引きずってるのかも」

夏 「何年前の話？」

明日香 「(指を二本)。あたしたぶん、普通より人の愛情を信じられないタイプなの。切られるかも、裏切られるかもって不安がいつも消えない。なんでだろ、やっぱ親に捨てられたからかな」

夏 「……新しい家族を持てば、変わったりしませんかね」(フェードアウト)

明日香 「……今の話、ないしょね」

夏 「お互いこだけの話ってことで、同盟結びましょう」

明日香 「(敬礼して) ラジャ」

夏 「兄とのこと、もう一度よく考えてみて下さい。兄の為じゃなくて……(赤ちゃんの為にも)」

明日香 「わかってる。よく考えてみる、(お腹の子と) 二人で」

明日香、笑顔を残して去る。
暗転。

秋生が器具を使ってトレーニング（例えばダンベル）している傍ら、夏がいる。

夏 「『幸せにする自信がない』?」

秋生 「俺はまともな親に育てられてない。アル中のどうしようもない親父しか知らない。だから……」

夏 「お兄ちゃんは別人格、ダメ親父は反面教師にすればいい」

秋生 「この秋からどんな仕事に就くか、何を目標に生きてくか、まだ何も決めてない。ちゃんと食わしていけるのか、夢を諦めた彼女は後々後悔しなにか」

夏 「偉そうなこと言うつもりも、言える立場でもないけどさ、人を幸せにする自信なんか誰も持てない。大事なのは、その人と一緒にいて自分が幸せだと思えるかどうか」

秋生 「……とにかく今はオリンピックに集中する。モスクワで納得できる精一杯の演技ができれば潮目が変わる。自分の中に太い軸ができて、困難にぶち当たっても、『日本を代表して戦ったんだ』って軸に戻って踏ん張れる」

夏 「明日香さんにもそう言った?お兄ちゃんの気持ち、考えてること、ちゃんと伝わってる?」

秋生 「……」

夏 「しっかりしなよ、もうすぐパパになるんだよ」

秋生 「!?」

秋生、器具を落として死にそうになる。
夏、「大丈夫?」と慌てて介助して、ハタと、

夏 「あれ、これも言っちゃいけなかったんだっけ?」

秋生 「……」

秋生、駆け出していく。

20 日体協会長の記者会見場

会長が他紙の運動部・社会部記者やカメラマンに追われてきて、会長がぶら下がり会見を始める。夏、わかばも来る。

会長 「日本体育協会としては、うー、かねてからの『参加』、『ボイコット』の他にもう一つ、『選手の個別参加』も一つの選択肢として、各競技団体と協議を進めてまいりたいと、うー」

夏 「日本選手団全員での参加はなしということですか?個別参加となった場合、費用は国が負担してくれるんですか?」

会長 「費用は各競技団体の負担、選手はメダル獲得が期待できる、すなわち三

位以内に入れる可能性が高い選手がー、うー」

記者たち、どよめく。

秘書 「次の公務がありますので打ち切らせていただきます」

記者たち、「待って下さい」「まだ質問があります！」と上手前に去る秘書と会長を追いかけて。

21 東和日報運動部（日替わり）

上手奥から紙面をチェックしてる大島が、夏とわかばに追われるように現れる。

大島 「日本も参加すべし？」

夏 「はい、『参加すべし』でいくべきだと」

大島 「あんたら日体協の会見行ってきたんじゃないの？」

夏 「イギリスは政府のボイコット勧告を無視して参加、カナダ、ノルウェー、西ドイツも参加する方向だそうです」

大島 「あんた、どこでそんなネタ」

夏 「他紙の社会部から、確かな情報です。明日は『日本も参加すべし』で行きましよう」

三宅 「部長、あがりました」

三宅がゲラを持ってきて大島に差し出す。

わかば 「なんですか？」

三宅 「早版のゲラ」

夏 「（読んで）『日本代表ボイコット確定』？」

わかば 「これで行くんですか？」

夏 「毎日新聞がオリンピック委員会理事に行った電話アンケートでは、ボイコット賛成が6、反対は倍以上の14。委員会は明日にも政府に嘆願書を」

大島 「嘆願書なんて単なるポーズ。政府がボイコットと言ってる以上、日体協も委員会も逆らえない。なんとって予算握られてるから」

夏 「ここまで来たらお金の問題より」

大島 「あんた来月から給料無しって言われても働く？」

神津 「（現れて）部長、本日12時から官房長官が緊急会見を開くそうです！」

新島 「個別参加について、最終決定が発表されるんですかね？」

夏 「行ってきます！」

わかば 「うちも！」

夏、わかば、駆け出してく。

神津 「おい、記者クラブに入ってねえのにどうやって取材するんだ？」

三宅 「政府はボイコットの正当性を国民に念押しする気ですかね」

大島 「カーターさんが大平さんを脅したらしいよ。『方が一にもアメリカに同調せず参加を決めたら、石油の輸出をストップする！』」

新島 「そしたら総理は？」

大島 『「はー、大統領の仰せの通りにー」』

三宅 「それ、いつの話です？」

大島 「今年の正月だって」

三宅 「正月？」

新島 「じゃ、今年のお正月の時点でもう」

神津 「日本のボイコットは決まってた。我々も国民もとんだ茶番に振り回された」

大島 「これ(ゲラ)進めて(渡して去る)」

三宅 「はい」

神津 「江川・西本の対談行ってきます(去る)」

音楽、カリンカー1(〜28秒間飛ばして1分15秒〜につなぐ)
一同動き出して、暗転。

日本代表総合練習施設の一角

シンクロチームが解散か個別参加か話しながら、四方から集まってくる。

ナオキ 「自腹で行くと、いくらぐらいかかるんですか？」

アフロ 「往復約三十万、その上に食費と宿泊費」

ユウスケ 「そんな金逆立ちしたって、只でさえ借金地獄なのに」

アフロ 「そもそも俺ら行く資格あるんですかね？メダルの可能性も限りなくゼロに近いのに」

サンタロウ 「行きたくないのか、お前は」

アフロ 「無理して行ってもテレビ中継もないし」

秋生 「アフロさんはテレビに出る為にやって来たんですか」

アフロ 「そうじゃねえけどよ」

サンタロウ 「じゃ何のためにやって来たんだ」

アフロ 「なんで俺だけそんな責められるんすか？何のためにやって来たかって、愛の為ですよ。愛の為に決まってるでしょ？何なら今ここで証明します？(ゴムパッチンを出す)」

サンタロウ 「やめろ！」

マコト 「(立ち上がり) コーチ、日体協に抗議に行きましょう、政府が何を言おうが、最終的に決めるのは日体協とオリンピック委員会。そこと連携して参加の道を探りましょう！」

コーチ 「……」

マコト「コーチ！」

コーチ「抗議には行けない」

マコト「なんで」

コーチ「予算削られたらどうすんの？」

マコト「予算なんか、オリンピック行けなきゃ何の意味も」

コーチ「今年だけじゃない、来年以降の補助金まで削られたら」

マコト「俺ら今年で最後です」

コーチ「シンクロは来年以降も続く。正式種目になるまで続いてくれなきゃ困る」
サントロウ「補助金切られたらコーチ料もえなくなるからですか？俺らにはバ
イト休んで練習しろって言いながら、コーチは自分の生活、旦那や子供
との暮らしを優先するんですか？」

コーチ「誰だって自分と家族が一番でしょ？子供はかわいいし家事も嫌いじゃな
い。家族は大事。でもそれ以上に私はシンクロが好き。だから妻にな
っても母になってもシンクロから離れなかった、お金なんかどうでも
いい、私が青春の全てをかけた競技が、この国からなくなるようなこ
とはできない！」

一同「……」

ユウキ「たしかに競技を続ける人、これから始める人のことも考えなきゃですね」
秋生「立ち上がって」じゃこのまま解散で、フェードアウトでいいのか？金

のこと、生活のこと、将来への不安、みんな色々抱えてる。だけどこ
こまでやって来た。俺はシンクロが好きだ、この仲間が好きだ、行く
しかないだろ！これで最後と決めた世界のひのき舞台で、思い切りや
り切って解散しよう。今日までのすべて、俺たちの集大成を、世界に
爪痕を残しに行こう！」

マコト「(立って)賛成」

サントロウ「俺も」

アフロ「じゃ、俺も？」

「俺も」と二人一人立つが、コーチは葛藤している。

秋生「コーチ！」

マコト「一緒に行きましょう！」

コーチ「……」

そこに、蒼白の夏とわかばが現れる。

秋生「(気づいて)夏」

夏「官房長官が会見で」

秋生「なんだって？」

夏「すべての競技は不参加、個人参加も認めない」

わかば「勝手に参加を決めた場合、その競技には今後一切補助金を出さないって」
一同「……」

マコト「クソ！」と壁を蹴る。

サンタロウ「知ってたんじゃねえの？」

夏・わかば「？」

サンタロウ「あんたら最初からボーコット確実と知ってて取材して、『かわいそ
うな日本代表』を記事にしようとしてたんだろ」

アフロ「そういうこと？」

サンタロウ「プレ競技でも日本代表には変わりないとか、日の丸を背負う重圧を
はねのけてとか散々持ち上げといて、地獄に突き落される瞬間をワク
ワク楽しみに待ってたのか？」

夏「まさかそんな……」

わかば「……」

音楽、カリンカ1（編集済み）、カットイン。あるいは、
SE、踏切の音。

夏、駆け出していく。

わかば「夏？（追いかける）」

秋生も追いかけて。
暗転。

83 赤坂の料亭近くの路地

神田橋が日体協会会長を案内して来る。

神田橋「さあさあ、競技会場はあちらです」

会長「さすが、官房長官と卓囲むとなると高級料亭借り切りか」

神田橋「いつもは産経記者の自宅マンションでやっています」

会長「あとのメンツは？」

神田橋「産経の記者が二人、朝日の社員が一人、東京高検の検事長も今向かって
ます、弊社が提供したハイヤーで」

会長「マスコミとズブズブの上に検察まで味方につけときゃ国民がいくらボー
コット反対しても政権は安泰だ」

「待って下さいー！」と、夏、わかばが現れる。
物陰に雪比古と春も来ている。

神田橋「夏」

夏「今から官房長官に会われますよね？来年以降の予算確保を条件にボーコ
ットを承諾するんですか？」

神田橋「おい」

会長「お宅の？」

神田橋 「いや、彼女は東和日報の」

会長 「東和日報って、記者クラブにも入ってないだろ」

わかば 「日本協の仕事は選手や競技団体を守ることじゃないんですか？」

会長 「何の話だ、私は仲間内の麻雀を打ちに来ただけ」

夏 「とぼけないで下さい！」

会長 「ボイコットの件は会見で話した通り、代表に選ばれながら出場を断念するほかない選手は本当に気の毒だと思うが、くじけずまた次の目標に向かい頑張ってもらいたい」

夏 「くじけずがんばれ？」 4年に一度にピークを持って行こうとしてる選手にとって、更に4年がどれほど長いか、あなたにはわからないんですか？」

会長 「期間中にテロや本格的な戦闘が勃発しないとも言切れない。そもそもボイコットを決めるのは我々日本協ではなくオリンピック委員会」

夏 「政府と密約を交わし、下部団体のオリンピック委員会に圧力をかけてるんでしょ？」

会長 「日本協もオリンピック委員会も、人件費から運営費まで国の補助金に頼ってる。スポーツも芸術も理想だけでは動かせない」

神田橋 「北野、いい加減大人になれ」

夏 「(会長に) お願いします、日本選手団をモスクワに行かせてあげてください！ 選手の為だけじゃない。私のように途中で夢を諦めた99%の人の為にも」

音楽、カチューシャ (オルゴール) カットイン。

会長 「99%」

夏 「諦めなければ夢は叶う」って言いますよね？でもそんなの嘘、たいがいの人の夢は叶いません。夢は叶うって言えるのは、ほんの1%の選ばれた人だけ、才能があって努力してものすごく運が良かったたつた1%。残りの99%は他の誰かの夢を応援して生きていくしかないんです。178代表選手の肩には、そんな99%の人の夢も乗っかってる。期待をという重圧を背負いながら、四年に一度の晴れ舞台で結果を出す為に歯を食いしばって来たんです！」

わかば 「女子体操の竹内由佳選手は、6年前わずか12歳で札幌の実家を離れ、福井県の体操スクールに所属。毎日血の滲むような努力を続けながら、「太ってはいけない」と食事を過剰に制限、栄養失調で歩けなくなつた時、スランプに陥つた時、ボイコットのニュースが流れ始めてからも、「これだけ頑張ったんだから絶対出られる」と信じて疑わなかったそうです」

夏 「世界選手権三連覇、出れば金メダル確実と言われている柔道山下は、いつかオリンピックの表彰台に立ち、メインポールに日の丸を仰ぎ見ることだけを夢見て十年以上、朝から晩まで柔道一筋で生きてきたと言ってます！」

秋生、マコト、サンタロウ、アフロも現れる。

秋生 「同じく金メダル確実のマラソン瀬古利彦は、「走って負けるのなら納得できるが、競技の場に立って敗北するのはありえない」と言っています！」
マコト「ボクシングの中村司は大学5年生、教師を目指して入学したのに、オリンピックの為の練習を優先して教育実習に参加せず、留年してモスクワを目指して来ました！」

アフロ「プロのスカウトを断ってオリンピックを目指した自転車・長義和選手は年齢制限で今さらプロにもなれず、どこにも行き場がありません！」
サンタロウ「同じ自転車の渡辺幹男は、引退宣言をして臨んだ去年の世界選手権に写真判定で2位に敗れ、『もう一度だけ夢を追う』と気持ちを奮い立たせ、この四年只ひたすら、ひたすらペダルをこぎ続けて来ました！」

秋生 「レスリング代表チームは正月から合宿を張り、真冬の海に飛び込んで精神を鍛え、世界一厳しい無茶苦茶な練習をやったのはモスクワで勝つ為です。52キロ級の高田はボイコット反対集会で、「これで出られなかったら今までの努力は何だったのか」と涙を流した。あの涙は高田一人の涙じゃない、57キロ級富山（とみやま）、68キロ級宮原、74キロ級伊達、90キロ級清水、100キロ級谷津、178代表選手みんなの涙です！」

サンタロウ「俺のお袋、癌であと半年しか生きられません。そのお袋が今、病院のベッドで横断幕縫っています。『男子シンクロがんばれ』って、毎日チクチクやっています。これ持ってモスクワに行くからなって言ってくれてます！」

夏 「どの競技のどの選手も、みんな人生賭けてます。家族や監督、裏方のスタッフ、色んな人の色んな思いを背負って命を懸けてモスクワを目指して来ました。お願いします、オリンピックに行かせてあげて下さい！」
コーチ「（現れて）もし国がお金を出してくれないと言うなら、私たちは泳いででもモスクワに行きます！」

会長 「……」（フェードアウト）

神田橋 「大声選手権はぼちぼち終了でいいかな？会長（促す）」

会長 「あー、うー、（去る）」

神田橋、会長を店に促す。

夏 「待つて下さいー！」

神田橋 「立ちふさがり」四年に一度のオリンピックは必ずアメリカ大統領選挙と同じ年。カーター大統領は選挙運動の一環として自分の力を世界に示したかった。ボイコットを打ち出し、同盟国を従わせることで存在感を国内外にアピールした」

わかば「ボイコットは戦争反対の為じゃなく、アメリカの大統領選の為だったってことですか？」

秋生 「日本はアメリカ大統領の選挙運動に付き合わされただけってことですか？」

神田橋「……」の世界は99%の庶民大衆の為でなく、別の世界に生きる1%の為に回っている」

神田橋、店に去って行く。

「待って下さい！」と追いかける一同。
暗転。

S、E、特急列車（新幹線？）の通過音。

24 東和日報運動部（日替わり）

大島、神津と大島が、出前の蕎麦（エア）を啜りながらポイコット騒動を総括している。

新島 「ゆうべ銀座の料亭で、文部省の体育局長がオリンピック委員会に圧力かけまくったって話、本当ですか？」

三宅 『政府の言うこと聞かなかつたら補助金出さねえぞ』って？」

神津 「いかにも日本らしい決め方だ。政治もスポーツも芸術も、大事なことは全て密室で決まる」

大島 「首相官邸とホワイトハウスの都合に振り回されて、オリンピックは押し流された」

突然の夏の声「だから私だったんですね？」

夏が入ってくる。

夏 「日本はモスクワには行けないと判ったから、入社3年目の私に担当を任せた。猪突猛進の体育会系なら何の疑問も持たず取材に行くと思った」

神津、三宅、新島が、「こちそうさま」「お先です」と井を手去って行く中、大島だけ残る。

夏 「これ、覚えてます？新人研修の時に配られた部長のコメント（開いて読む）『新聞は歴史書の最初の下書きであるべきです』」

「そんなのまだ持ってたの？」

『報道の自由を守る唯一の方法は、常に報道し続けることです！』

「……」

『スポーツが持つ魅力や素晴らしさを読者に伝える、それが運動部の仕事です。試合の結果だけでなく、一つのプレイ、一人の選手に隠されたストーリーを掘り起こす、挑戦する人の想いを伝えることが大事だと思えます』

「……」

「私は今日までこの言葉を信じて仕事してきました」

「……」

夏、内ポケットから辞表を取り出し、デスクに置く。

夏 「お世話になりました(行こうとする)」

大島 「退職願いは最低一月の猶予を持ち、業務を引き継ぐ義務がある。あんたには引き続きオリンピックピックを担当してもらおうから」

夏 「だって日本選手団は」

大島 「明日の臨時総会、もちろんモスクワにも行ってもらおう。たとえ日本がボイコットしてもオリンピックピックが世界的大イベントであることには変わりない。きちんと取材して記事にしないと」

大島、辞表を突き返し、去って行く。

音楽軍歌と共に録音SE、街宣車の声『モスクワ・オリンピック・

ボイコット、ソ連軍は、今すぐ、アフガンから撤退しろー!』

夏 「……」

わかばモノ「五月二十四日、モスクワオリンピックナショナルエントリー締め切りの日、渋谷の岸記念体育館前では右翼の街宣車が『ボイコット』を連呼し、左翼グループが『圧力に負けるな』と訴える中、日本オリンピック委員会が臨時総会が行われた。ボイコット反対派の怒号が飛び交う中採決が強行され、参加13、不参加29で不参加を採択。この瞬間、日本のモスクワオリンピックピックボイコットが正式に決定した」

軍歌、大きくなって。

暗転。

25 北野家

夏が意気消沈で座っているところに、冬美がちやぶ台を運んでくる。

冬美 「いつまでもくよくよしててもしょうがないだろ、ごはんにするよ、手伝おう」

夏 「……ごめんね、モスクワ行こうなんて、期待させちゃって」

冬美 「日本がボイコットしたのはあんたのせいじゃない」

夏 「結局何もできなかった。生まれつきそういう星の元に生まれんのかな。負け癖がついてるって言うか、勝利の女神に見放されてるっていうか」

冬美 「人生は長い。勝つこともあれば負けることもある」

夏 「いいな、お母さんはポジティブで」

冬美 「五体満足に生まれて、元気に生きてるだけでありがたい。お前はお前自身の為、お前が楽しいと思える時間をたくさん持てるように、只生きればいい」

音楽、家族のテーマ、カットイン。

夏 「そんな、只生きてるだけじゃ」

冬美 「いいんだよ生きてるだけで。大きなこと成し遂げなくても、たくさんお金を稼げなくても、えらくならなくてもいい。そのうちきつと、『あー、生きててよかった』と思える日が来る。今のあたしみたいに」

夏 「……お母さん、今幸せ？」

冬美 「幸せだよ、あんたと、春と雪比古がいてくれるから」

夏 「……」

冬美 「そう言えば春、明日テレビ局の最終面談だって。いよいよ内定もらえるらしいよ」(フェードアウト)

夏 「えー？」

突然の春の声 「行かないことにした」

夏・冬美 「？」

春が入ってくる。

春 「最終面接には行かない」

夏 「なんで」

春 「あの会社には入りたくない」

冬美 「なんで？」

春 「テレビ局に入れば、お姉ちゃんの言う1%の人になれると思ってた。でもそうじゃない気がする。私はもつと、自分の考えや言いたいことが言える、聞いてくれる会社で働きたい。今度気象会社の面接に行ってくる」

冬美 「気象会社？」

春 「まず気象予報士の国家資格取って、そこからテレビ局に派遣してもらってお天気キャスターになる」

夏 「そんなやり方もあるんだ」

冬美 「いいと思うよ、春がそう決めたらなら」

夏 「がんばれ」

春 「うん」

突然の雪比古の声 「俺も行くよ」

三人 「？」

雪比古が入ってくる。

春 「どこに？」

冬美 「古新聞もらいに？」

雪比古 「俺は……、学校に行く」

夏 「マジ？」

雪比古 「学校行って、先生にこの作文を提出する」

夏 「さくぶん？」

雪比古 「口ではうまく言えないかもしれないから、全部作文に書いた」

冬美 「なにを？」

雪比古 「何度も書き直したんだけど、これでちゃんと伝わるかどうか、ちよっと聞いてみて」

三人 「……」

雪比古、深呼吸したり姿勢を正したりしてなかなか読み出せず、みんなにせかされて、

雪比古 『石田先生へ』

M、未定、カットイン。

雪比古 『一年のゴールデンウィークに、クラスの五人で駅前の文房具店に行きました。A君が度胸試しをしようと言いつし、ぼくらは順番に万引きすることになりました。僕は『見つかったらヤバイ』と言ったけど、A君は、ゲームに参加しない奴はハブると言って消しゴムをポケットに、B君はシャープペンシルを鞆に、C君は下敷きをズボンのベルトに差し、三人で僕とタケシを睨みました。僕とタケシは勇気が出ませんでした。三人は舌打ちをして出て行ってしまいました。僕とタケシは店を出るとそれぞれ家に帰りました。次の日から、三人はタケシをイジメ始めました。上履きや体操着を隠したり、鞆にゴミを入れたり、ノートをビリビリに破って捨てました。僕はずっと、見て見ぬふりをしていました。チクれば僕がいじめられると思っただけです。いじめは毎日毎日、一学期が終わるまで続きました。タケシは親にも先生にも言えないように、黙って耐えていました。一学期の終業式のあと、僕はA君らに呼び出され、お線香と百合の花を渡され、タケシの下駄箱に入れて来いと言われました。3人に囲まれて嫌だと言えず、僕は火のついたお線香と百合の花を下駄箱に入れました。何も知らないタケシが下駄箱を開けると、お線香の煙がもわっと出て、タケシはすごく驚きました。物陰から見えていたA君たちは笑ったけど、僕は泣きそうでした。タケシはしばらくその場に突っ立っていたけど、お線香の火を消し、百合の花と一緒にゴミ箱に捨て、家に帰って行きました。僕はそれからずっと、夏休みの間、何度も下駄箱のタケシを思い出しました。早く先生に言った方がいい、今までのことを全部話した方がいい思っただけ、明日でいい、明日にしようと思っっているうちに休みはほとんど残り少なくなり、とうとう夏休み最後の日……（泣いて読めなくなる）』

冬美 「もういいよ」

夏 「続きは知ってるから」

冬美 「だから学校行けなくなっちゃったんだね」

雪比古 「……」

夏が作文を取ろうとするが、雪比古は渡さず、

雪比古「(自戒を込めて大きな声で)夏休み最後の日、タケシは……、学校の校門で首を吊って死んでしまいました!」

三人「……」

雪比古「……俺だったかもしれない。いじめられたのは、首をつらなきやいけなかったのは俺だったかもしれない。せめて俺がもっと早く先生に言っていたら、タケシの親に言っていたら。だけど俺は……怖くて誰にも言えなかった。家から出られなかった。ずっと誰にも、黙ってた」

号泣する雪比古を、冬美が抱きしめる。(カットアウト)

冬美「苦しかったね、辛かったね。二年も一人で抱え込んで。気づいてあげられなくてごめん、何もしてやれなくてごめんよ」

夏「その手紙、先生に出してきな」

春「イジメた子の名前も全部言っちゃいな」

冬美「何があっても母さんが守ってやる。校長先生が何言っても、母さん絶対負けない!」

夏「あたしも」

春「あたしも」

冬美「何があっても、あたし達はあんたの味方だよ」

雪比古、次第に落ち着いて来る。

夏、おもむろに準備体操を始める。

春「なにしてんの?」

夏「アップ」

春「なんで?」

夏「久々に走ってみる、タイム計ってくんない?」

春「走る?なんで?」

夏「なんか、走りたくなった」

三人「……」

夏「(ストップウォッチを取ってきて春に)ほら、計って」

春「……あたしも一緒に走る」

夏「なんで」

春「走りたいから」

夏「ついてこれるわけないじゃん」

春「いいじゃんべつに、私は私で走るから」

雪比古「俺も」

三人「?」

雪比古「俺もいっしょに走る。俺も走りたくなった」

夏「(嬉しいが)じゃ誰がタイム計んのよ」

春「お母さん」

夏 「お母さん昔からストッププウオッチ下手だもん」
冬美 「失礼ね、ストッププウオッチぐらい使えるわ」
夏 「本当？ちゃんと計れる？（渡す）」
冬美 「いい？行くよ？」
春 「待って、何メートル？」
夏 「3000」
春 「えー6.1500（ごごよ）」
夏 「3000-」
雪比古 「俺、やっぱやめとく。二年ぶりに外に出て、いきなりそんなに走ったらケガしそうだし」
夏 「今更遅い！ほら、並んで」
冬美 「よーい、ドン！」

正面に向かい、走り出す三人。

冬美 「待って、押すところ間違えた」
夏 「ほらー！」
春 「えー」
冬美 「もう一回、よーい、……ドン！」

笑顔で走り去る三人。
笑顔で見送る冬美、ストッププウオッチを見て、
冬美 「あれ？しまった、また（押すところ間違えた）。ちよつと待って！おーいー」

追いかけて行く。
暗転。

音楽、ロシア音楽DVD29曲目、カットイン。

26 プロローグのモスクワに戻る

わかばモノ「1980年7月19日、レーニン中央競技場。モスクワオリンピック開幕。国際オリンピック委員会加盟国147の内、81の国と地域が参加。アメリカ、日本、西ドイツなど66か国が不参加という異例の大会となった。ファンファーレが鳴り、チャイコフスキーの曲が流れ、各国選手団が入場して来る」

音楽、『チャイコフスキー交響曲第6番 悲愴』？

わかばモノ「いつまで待っても日本選手団は出て来ない。隣にいた西ドイツのカメラマンが話しかけてきた。『あんた日本の新聞社かい？選手の代わり

に俺らが国旗持って行進しようぜ』。悲しいジョークだった。同じアメリカの同盟国でも、イギリス、フランス、オランダは堂々と参加した。国の反対を押し切って参加したニュージーランド選手団が国旗を掲げず歩いている姿をファインダー越しに見た時、なぜか涙があふれた。(フェードアウト)

柔道会場の観客席に一人の日本人がいた。活き活きと戦う外国人選手をじっと見つめていたのは世界選手権三連覇中の山下泰裕だった。寂しそうな背中だった。なぜ世界一強い男がオリンピックに参加できないのか、大きな背中を300ミリの望遠レンズで撮りながら、私はまた涙を流した。山下に気づいた外国人選手が駆け寄って声をかけ、肩を叩き、抱き合って無念の山下・世界最強の男を励ましていた」

音楽、ロシア民謡ステンカラー (DVDその他1曲目)

わかばモノ「八月三日、閉会式。レーニン中央競技場の聖火が消える。観客席に人文字で描き出された大会マスケット、こぐまのミーシャが一筋の涙を流した。素晴らしいマスゲームだった。ミーシャは集まった選手たちとの別れを惜しんで泣いたのか、ボイコットした国々の選手たちに思いをさせたのか、私はまた泣いた。ファインダー越しに見たミーシャが涙でぼやけ、シャツターを切る指が震えた。ミーシャの目からポロポロとこぼれ落ちる白い涙を、ソ連の関係者は歎びの涙だと言ったけど、私にはそう思えなかった。こぐまのミーシャの目から溢れたのは、世界の選手が一同に集まるのが叶わなかった、悲しみの涙だ」

閉会式を見つめる夏の元に、神田橋が近づいて来る。(フェードアウト)

神田橋「残念だったな、お兄さんの晴れ姿見られなくて」

夏「はい」

神田橋「どうするんだ、仕事は」

夏「……まだ、考え中です」

神田橋「察しはついてるだろうが、政府と日体協をジョイントしたのはウチだ。国の方針に沿って世論を誘導した」

夏「……国って誰のことですか？一人一人がいて、初めて国になるんですよ？」

神田橋「……入社三年目か、その頃は俺も正義に燃えてた。自分が見たまま聞いたまま、真実を正しく報道するのがメディアの役割だと信じてた」

夏「なんで変わっちゃったんです？」

神田橋「さあな、……年を取ったんだろ」

夏「でも私、オリンピックを担当させてもらったおかげで、居場所を見つめることができました」

神田橋「いばしょ？」

夏 「ずっと探してた、陸上も仕事も中途半端、私の居場所はどこだろう、私は何のために生まれたんだろう。考えても考えてもわからなかったのに」

神田橋 「どこで見つけたんだ？」

夏 「居場所はもともとあったんです。私は私のまま、只生きてればいいって言ってくれる人がいて。だから……、ここからまた、次のステップに進みたい」

神田橋 「次のステップ？」

夏 「仕事もプライベートでも、新しい自分に出会いたい」

神田橋 「……なるほど」

夏 「……長い間、ありがとうございました」

M『いい日旅立ち』（仮）カットイン。
深々と頭を下げる夏。

夏 「さよなら」

夏、立ち止まるが、振り返らず、歩いて行く。

神田橋 「……」

27 こゝ日旅立ち（披露宴会場）

明日香、歌。咲、ユウ、ダンサー。ショーアップ。

司会者（夏）「新婦明日香様の歌に続きまして、いよいよ本日のメインイベント、新郎が所属する日本代表チームによるシンクロナイズドスイミングを披露させていただきます」

28 その楽屋

コーチを中心にメンバーが円陣を組んでいる。
その様子を、わかばが写真を撮っている。

コーチ「長いことシンクロにかかわってるけど、まさか結婚式の余興でやることになるとは思わなかった。舞台はモスクワのプールじゃなくて、吉祥寺のホテル宴会場になっちゃったけど、できる範囲でベストを尽くそう」

秋生ら「はい」

コーチ「日本代表のプライドを胸に、今までやって来たこと信じて、持つてるもの全部出して」

秋生ら「はい」

コーチ「だるまさんが！」

秋生ら「転んだーっ！」

気合を入れ、スタンバイに向かうメンバー。
入れ違いに夏が現れ、居残った秋生と対峙する。

夏「いよいよだね」

秋生「うん」

夏「(袖に)早くー！」

もじもじ出て来る春と雪比古。

夏「ほら、自己紹介」

雪比古「雪比古です、はじめまして。あ、はじめましてじゃねえや。愛読紙は朝日新聞です」

春「春です、ご無沙汰してます」

秋生「二人とも、大きくなったな。さつそくだけどみんなに一つ報告がある。俺、四年後を目指すことにした」

夏「四年後？」

秋生「みんなで次のオリンピックまで頑張る」

夏「マジ？」

「またバイトしながら四年間、本当に頑張れるかどうかわかんないけど、このまま不完全燃焼で終わりたくない。だからあと四年、自分と仲間を信じてとことんやって、それからまた次のことを考えようってみんなで決めた。嫁さんも許してくれたし」

ウエディングドレスの明日香、呼びに来る。

明日香「秋生、みんなスタンバってるよ」

秋生「紹介するよ、明日香」

明日香「はじめまして、明日香です」

春「妹の春です」

雪比古「雪比古です。愛読紙は、……あー、かあちゃん、早く早く」

夏「お母さん、何してんの？早くー！」

冬美、俯いて出て来る。

秋生と対峙しても、冬美は俯いたまま。

秋生「お母さん、久しぶり」

冬美「……」

夏「お母さん、何してんの？」

明日香「お義母さん、初めまして。明日香と申します。不束者ですが、どうぞよろしくお願いします」

冬美「……」

夏 「お母さん？ちゃんと挨拶しなきゃ失礼だよ」
冬美 「……」

物陰で見っていたわかば、おずおず現れ、

わかば 「とりあえず、先に記念写真？」
夏 「いいね、あんたもたまに役に立つね。みんな並んで、早く」

一同、わかばに向かい、並ぶ。

夏 「わかば」
わかば 「？」

夏 「あたし、会社に残って、もう一度金メダル目指すから」

わかば 「金メダル？」

夏 「オリンピックで一面トップ」

わかば 「……となると、うちの写真も必要だね」

夏 「だってあんた」

わかば 「妹が送り迎え引き受けてくれることになって、お父ちゃんも『一面トッ
プ撮るまで帰って来るな』って」

夏 「(嬉しいが) えー？じゃまたピンボケ女とコンビかよ」

わかば 「撮りますよー、お母さん目線くださいーい。ハイ『だるまさんが』」

一同 『転んだー』

SE、シャッター音。

明日香 「じゃ、お母さん、またあとで」

夏 「(察して) 私たちも行つてよ。いいからいいから」

M、カチューシャ(オルゴール)あるいはコロプチカ(オルゴ
ール)、カットイン。

明日香、夏も春と雪比古を連れて去る。

秋生と冬美、二人気になる。

秋生 「お母さん」

冬美 「……大きくなったね。……立派になったね。すごいね、日本代表なんて。

お母さん……本当に嬉しい。……会えてよかった。結婚、おめでとう」

秋生 「ありがとう、俺も、会えてよかった」

夏、壇上に戻ってきてこっそり二人を見つめる。

夏、左胸に触れ、前向き、その手を離す。

冬美 「……」

秋生 「……」

夏 「……」

暗転。(フェードアウト)

司会者(夏)「皆様、大変お待たせいたしました。日本チーム登場です。(五輪ア
ナウンス風に)ジャパーン！」
夏 「日本代表、がんばれー！」

男子シンクロ

無音。

さくさくさくさ

クラシック

カチューシャ

シンクロ、12人高速回転のまま……、暗転。

カーテンコール